



TITLE:

心理的であり公共的である意味について(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

三木, 那由他

CITATION:

三木, 那由他. 心理的であり公共的である意味について. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-09-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19251>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	三木那由他
論文題目	心理的であり公共的である意味について		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の課題は、グライスの問題意識を継承しつつ、「人が発話や身振りによって何かを意味するとはどういうことか」を問うことにある。グライスは、このような局面で成立する意味を「発話者意味」と呼び、「その成立の必要十分条件とは、発話者が適切な「意図」を持つことに他ならない」とする基本的な想定の下、「発話者意味」に対する「意図基盤意味論」を構築した。本論は、この「意図基盤意味論」に対する批判的検討を通じて、「発話者が自らの信念に対する適切な「証拠」を受け手に提供すること」が発話者意味の必要十分条件だとする、独自の「信念証拠意味論」を提案する。</p> <p>本論全体に対する概観を与える第一章「序章」に続く本論の主要部分は、「意図基盤意味論」を紹介し、その問題点を検討する第一部「意図基盤意味論をめぐる」（第二・第三・第四章）と、その検討を踏まえ「信念証拠意味論」を提案する第二部「意味と信念」（第五・第六・第七章）に分かれる。</p> <p>第二章では、意図基盤意味論が初めてまとまった形で提案されたグライスの論文（「意味」）を読み解くことで、意図基盤意味論の基本的な発想を見極めることが試みられる。</p> <p>第三章では、意図基盤意味論に対して提起されてきた「意図の無限後退」問題を概観した上で、意図基盤意味論者は、その問題に対して適切な解決を与えていないこと、その問題の原因は、「意図」という私秘的な説明項では、「意味の公共性」と本論が呼ぶ、発信者意味の重要な側面を十分には捉えきれない点にあることが指摘される。</p> <p>第四章では、適切な意図を持つことが、発信者意味が成立するための必要条件でも十分条件でもないことが、いくつかの思考実験を通じて示される。本論によれば、これらの思考実験は、先の意図基盤意味論の基本的な想定に対する反例として機能するはずである。また、これらの思考実験は、発信者意味の成立にとっては、むしろ「発信者の信念に対する適切な証拠の提示」が決定的に重要であることを示していると主張され、その上で、意図基盤意味論に対する代替案として信念証拠意味論の基本的なアイデアが提案される。</p> <p>第五章では、信念証拠意味論における「証拠」概念の内実を明らかにするため、心理学や語用論の研究成果を踏まえ、発話などの発信手段が、ジェスチャーや視線といった側面をも兼ね備えたマルチモーダルな存在者であることが主張される。</p> <p>第六章では、ここでの「証拠」概念が、改めて、アブダクション推理の一前提として捉え直された上で、信念証拠意味論が本格的に提示され、それが、意図基盤意味論が抱えていた種々の問題を回避できることが論じられるとともに、この新理論の可能性が探られる。</p> <p>最後に第七章では、本論全体の結論とともに、さらなる課題が列挙される。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文の主要課題は、20世紀を代表する言語哲学者の一人であるポール・グライスの問題意識を継承しつつ、「人が発話や身振りによって何かを意味するとはどういうことか」を問うことにある。グライスは、このような局面で成立する意味を「発話者意味」と呼び、「その成立の必要十分条件とは、発話者が適切な「意図」を持つことに他ならない」とする「基本テーゼ」の下、「発話者意味」に対する「意図基盤意味論」を構築した。本論は、この「意図基盤意味論」に対する批判的検討を通じて、「発話者が自らの信念に対する適切な「証拠」を受け手に提供すること」が発話者意味の必要十分条件だとする、独自の「信念証拠意味論」を提案する。このように本論文は、単に先行学説の批判的検討にとどまらず、それに対して抜本的な改訂を加えた代替案の提示をも行っている点で、極めて野心的なものである。

本論文は「意図基盤意味論」に対して二つの批判を加えるが、それらはいずれも上記の基本テーゼに向けられる。第一の批判は、そのテーゼは「意図の無限後退」という困難に陥らざるを得ないというものである。意図基盤意味論に対しては、「それが提案する必要十分条件を満たしているにも関わらず、発信者意味が成立しているように思えないケース」が指摘されてきた。このような反例を排除するため、グライスは、「適切な意図」に関する新たな条件を追加するという方策をとったが、この新条件に対しても同様の反例が発生することが、これまた指摘されてきた。この第二の反例を排除するため、適切な意図に関する第二の追加条項を設定しても、今度は同様の第三の反例が発生し、このことは無限に続く。結果として、意図基盤意味論は、発話者意味の必要十分条件を設定できない。これが「意図の無限後退」の困難である。本論は、この問題を巡る議論を丁寧に再構成した上で、意図基盤意味論者は、この困難に対して満足な応答を与えていないという診断を下す。

第二の批判は、意図は発話者意味の必要条件でも十分条件でもないというものである。ここで本論は、サールやマッケイらが異なった文脈で提示してきた思考実験例を援用しつつ、用意周到な議論を重ねることで、意図基盤意味論の基本テーゼに対する反例を鮮やかに指摘することに成功している。

以上を単なる批判のための批判に終わらせないため、次に本論は、これらの批判によって露となる、発信者意味に関する重要な洞察を導く。それは、発信者意味が成立するためには、受け手が、そこから発信者の信念を読み取ることができる、公共的な手段、即ち適切な証拠が不可欠であるという事態である。その上で、発信者意味を「意図」という私的な心理的存在者にもとづける意図基盤意味論では、「発信者意味の公共性」と呼ばれる)このような事態を適切に捉えることができないと主張される。信念証拠意味論は、この発信者意味の公共性を確保する代替理論として提案されるのである。

このように本論文は、先行学説に対する緻密で正確な分析力と、問題となっている事

柄に関する適切な把握力、さらには骨太に対抗案を描き出す構築力をも兼ね備えたものである。またそれは、言語哲学の最前線のトピックに関して独自の貢献をも成し得ている。

本論文にも不満点がないわけではない。例えば本論文は、証拠概念を、発信手段のマルチモーダル性（例えば発話がジェスチャーや視線といった多様な様相を持つという性質）やアブダクション推論といった概念を用いて特徴づけようとしているが、その概念規定が未だ概略に留まっており、結果として代替案である信念証拠意味論自体の内実が十分に明らかになっていない点である。しかしこの問題は、本論文の深刻な瑕疵と言うより、著者の今後の研鑽によってさらに発展させられるべき課題であり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2015年6月8日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。